

ドラフト 1 位の選手の成績とチームへの貢献度に関する分析

The analysis of the record and degree of contribution for team by the players picked in the first-round draft of baseball

1K09B501

小高 達也

指導教員 主査 平田竹男 先生

副査 中村好男先生

【背景】

日本のプロ野球界では、新人選手を獲得する際に、ドラフトという制度を設けている。基本的にはこのドラフト会議で指名されない限り、プロ野球団に所属することができないことになっている。そのドラフト会議の中でも最も優秀であると言われる選手が、毎年ドラフト 1 位指名を受け、入団している。例えば 1965 年に行われた第 1 回のドラフト会議では読売ジャイアンツに堀内恒夫投手が入団し、結果的に 203 勝を挙げ、名球界に入った。近年では 1998 年にドラフト 1 位で西武ライオンズ（現：埼玉西武ライオンズ）に平成の怪物こと、横浜高校の松坂大輔投手が 3 球団競合の末、入団した。このように毎年 12 人しかいないドラフト 1 位の選手が誕生し、多くのスター選手を輩出している。

【目的】

ドラフト 1 位の選手は高い期待をされている。ところが、実際蓋を開けてみるとどうなるかが分からないのがプロの世界だ。例えば 2012 年シーズンにパ・リーグの新人王に輝いたのはドラフト 1 位で千葉ロッテマリーンズに入団した藤岡投手ではなく、ドラフト 4 位で入団した益田投手であった。このように必ずしもドラフト 1 位の選手が活躍し、新人王に輝くわけではないことが窺える。

そこで本研究ではドラフト 1 位で入団した選手がどのくらい活躍しているのか、またチームの成績にどのくらい貢献しているのかを分析し、ドラフトで 1 位の選手を獲得する際に各球団がどのような方針で挑むかということの戦略的提示をすることを目的とする。

【方法】

ドラフト 1 位の選手がどれ程活躍、貢献しているのかを分析し、新たなドラフト戦略を提言するために、①2005～2011 年の各チームのドラフトにおけるくじの勝率と 2006～2012 年シーズンのチームの成績の比較分析②2005～2011 年のドラフト 1 位選手を競合、単独、外れに分類し、個人の成績の分析③2005～2011 年のドラフト 1 位で獲得した選手を球団ごとに分け、その貢献度とチームの成績に関する分析を行った。具体的な手法はインターネット、書籍、プロ野球名鑑、野球雑誌などの文献、資料を用いた。

【結果】

ドラフト 1 位の選手は基本的に戦力となり、チームに貢献しているということが分かった。

2006～2012 年シーズンでリーグ優勝、もしくは日本一になっているチームは高くくじの勝率を誇っていることが分かり、逆にくじの勝率の悪いチームは優勝できていないということが結果に表れた。

また、競合、単独、外れのドラフト 1 位では競合もしくは単独で獲得した選手の方が活躍するということも分かった。これは特に投手の方で際立っていた。例えば競合した選手は 75 勝を挙げている楽天イーグルスの田中将大投手を筆頭に 19 人中 11 人が通算で 10 勝以上をしているが、外れの選手は北海道日本ハムファイターズの吉川光夫投手の 20 勝が最高で通算で 10 勝以上している投手は 24 人中 5 人しか存在しないという結果になった。

また優勝しているチームはドラフト 1 位の選手が貢献しやすい傾向にあった。例えば巨人のドラフト 1 位野手は 4 人で 5048 打数を数え、1425 本もの安打を放っている。その一方で阪神のドラフト 1 位野手は 3 人で 120 打数 21 安打しか放っていない。このように優勝しているチームはドラフト 1 位選手の成績が少なからず関係していることも分かった。

【考察】

ドラフト 1 位の選手は競合、もしくは単独で獲得する選手の方が確実に活躍する可能性が高いことが以上の結果から分かった。よって各球団はドラフト 1 位にはその年に最も評価されている選手を獲得しに行くべきだと考える。その結果、競合になってしまったとしても、最初から安全策の選手を取りに行くよりも、将来的な球団への貢献度を考えても、くじに挑戦し、より良い選手を獲得しに行く方がメリットがあると言える。

しかし、万が一、くじを外してしまった場合のことも考えなければならない。その時は将来性、化ける可能性のある高校生の野手を獲得することを薦める。野手の場合は投手よりも肉体改造やフォーム改造により、化ける可能性が高いからである。その良い例が、読売ジャイアンツの坂本勇人選手やオリックスバファローズの T-岡田選手である。彼らは高校時代の評価では同期である中日の堂上直倫選手よりも下であったが、現在の成績を比較してみると、その評価は完全に逆転していると言える。

【結論】

一般的に競合必須のスーパールーキーと言われるような選手は評判だけでなく、結果的にそれなりの成績を残し、チームの勝利に貢献していることが分かった。よってドラフト 1 位の選手はドラフト 1 位と言われるだけの価値を持っていると私は考えている。